

■伊達得夫 出版経営者。「二十歳のエチュード」で『書肆ユリイカ』を始め、無名の詩人たちの詩集を次々刊行、時代を画した。
だてとくお
大暴落・・・1920＝ 釜山広域市で、建築業関係の伊達重吉・まつの次男に生まれる。9つ上の姉雪子、4つほど上に兄がいた。
原敬首相暗殺1921＝ 1歳：

円本時代始・1926＝ 6歳：妹賀代子が誕生。小学校入学時から、成績トップで級長だったが、悪戯好きの自由な少年で、

世界恐慌・・・1929＝ 9歳：

満州事変・・・1931＝11歳：
五一五事件・1932＝12歳：京城中学校に進み、

この間、横浜商業に進んでいた兄が死去し、実質的に長男になる。

日中戦争始・1937＝16歳：なお警察沙汰になるような悪戯をしながらも、成績優秀で卒業し、福岡高等学校に入学。
小遣いに不自由しなかったらしく、毎夜飲み歩いて放歌高吟して英雄気取り、

総動員+健保 1938＝18歳：
第二次大戦始1939＝19歳：同級生らで雑誌『青々』を創刊し、小説「手紙を見せる女」を、
日米開戦・・・1941＝21歳：才能示す小説「Paradox」を発表。京都帝国大学経済学部に進学、{京大新聞}に論説「知性の感傷」を、
近代の超克・1942＝22歳：随筆「ちひさい話」、映画評「鳥居強右衛門」を、
創価学会検挙1943＝23歳：「陸軍航空戦記」、戦場を思う随筆「就職記」を、あるいは{青々}に口語短歌や長詩を発表するうち、戦時下の
繰り上げて、卒業。{満州航空}に就職し、新京に赴任するも、徴兵され、静岡の連隊に入営。

年金+総武装 1944＝24歳：{青々}第5号に、内モンゴルの駐屯地で“死の淵を覗いた”体験記「風と雁と馬蓮花」を寄稿、
敗戦・・・1945＝25歳：経理部の幹部候補生に採用され、岐阜の倉庫を担当するうち、敗戦となり、大学時代を過ごした京都に戻り、
家庭教師をしていた関係で知っていた永井薬局の長女田鶴子に結婚を申し込むと、おそらく京都で初代児童保護司をしていた篠原志代の縁で少年院に勤めるも合わず、上京して{前田出版社}に就職、向島の花街の家に間借りして結婚生活を始める。やがて、2人の娘をもうけ溺愛し、遊ぶことで仕事から解放される。

新憲法公布・1946＝26歳：{青々}の編集後記に、多くの友を失ったことへの寂寥感を綴り、この年、一高生原口統三が逗子の海で入水自殺、その遺稿ノートを出版したいという原口の友人橋本一明の記事を{読書新聞}で見つけるや、矢もた
まらず、一高に橋本を訪ねて交渉(この時、最初に会った中村稔が取次ぐ)、著作権問題など不明のまま、

新憲法施行・1947＝27歳：{前田出版社}から*「二十歳のエチュード」を出版するや、たちまち売切れ、ベストセラーになってゆく。{新潮}に掲載された稲垣足穂のエッセイ「キタ・マキニカリス」を読んで、その魔力にとらわれ、彼を訪問、その
窮乏ぶりに愕然とするが、彼が多くの原稿を抱えて来社し、童話集に、彼の「チョコレート」を収録、

極東裁判決・1948＝28歳：橋本の印税の処理などが問題で{前田出版社}との関係悪化。再び橋本と交渉、その同書の紙型を持って独立、
稲垣足穂や牧野信一の触発により、アルキメデスの“われ発見せり”の語を用いた*{書肆ユリイカ}を創立して「二十歳のエチュード」を出版。その収益で、上落合の土地を購入。原口の書簡・遺書・友人らの追悼文を収めた「死人覚え書」も刊行。稲垣足穂の「キタ・マキニカリス」を出版し、12年前に首吊り自殺した牧野信一の「心象風景」を宇野浩二を介して発行、印刷屋のミスによる大乱丁での大損失も、責めることは無く、

三大事件・・・1949＝29歳：{前田出版社}が橋本の承諾の無いまま「二十歳のエチュード」第三刷を出版するも、著作家組合の尽力で和解。「二十歳のエチュード」に中原中也の詩の一つが書き込まれていたことから、すでに「中原中也詩集」を編んでいた大岡昇平を訪ね、彼を介して、中原家の承諾を得て、中原中也訳「ランボオ詩集」を刊行、

朝鮮戦争始・1950＝30歳：続いて、安原喜弘著「中原中也の手紙」を刊行して、中也という人物の周知に貢献するも、採算が合わず、生活費のために、教科書参考書専門の{自由書院}に勤務しながら、福田正次郎「ETUDES」を皮切りに詩集出版を始め、これは彼の教え子たちの努力で売り切れ、続く「中村真一郎詩集」、中村稔の第一詩集「無言歌」は好評だったが、なお採算は合わずに苦勞。

独立回復・・・1951＝31歳：稲垣足穂の面倒を見て貰っていた篠原志代が、彼と結婚。
マデー事件・1952＝32歳：この年、関根弘が、若い人たちの発表の場{列島}を発刊。安倍公房らの同人誌{現在}の発行を引き受ける。「二十歳のエチュード」が角川文庫に入った際にも、一切愚痴・苦情を言わなかったように、人にやさしいが故に、誰からも愛されて、何とか仕事を続けることができ、

テレビ放送始・1953＝33歳：石川県内灘開争に、{現在}のメンバー真鍋呉矢とともに駆けつけるなど、共産党にも傾斜。真鍋の原稿がなかなかできずに困り果て、ようやくパンフレット「内灘」をつくって行商するも全く売れず。
自衛隊発足・1954＝34歳：関根弘が、{列島}の編集後記に人手不足を嘆いていることを知るや、手を上げ、彼の仕事場の昭森社の机を一つ借りるも、{ユリイカ}に専心するが、受け入れられる。翌年にかけて、*「戦後詩人全集」全五巻を刊行。まだ一冊の詩集も出していなかった大岡信らが登場する役割を果たし、画期となる。

55年体制始・1955＝35歳：{ユリイカ双書}として大岡信らの評論なども刊行。全集にもれた入沢康夫の「倅せそれとも不倅せ」、川崎洋の「はくちょう」を出版するなど、無名の若い詩人たちから詩集出版の希望が持ち込まれ、人から頼まれると断れない性格からか、以後、毎年のように出版、損失も多く窮乏、

国連加盟・・・1956＝36歳：大岡信の第一詩集「記憶と現在」出版。詩誌{ユリイカ}を創刊、第2号で、中原中也を特集、大岡信が俊才ぶりを発揮したほか、以後、すべて戦後詩人らの作品や評論に限るという大胆な試みで時代をつくる一方、

なべ底不況・1957＝37歳：{今日の詩人双書}を発刊、
インサントーメ・1958＝38歳：{ユリイカ}誌上の丸谷才一の時評も詩壇に新風を吹き込んだ。続いて{海外の詩人双書}も始める一方、詩人らには全く伏せてきた稲垣足穂への愛を形にすべく、「稲垣足穂全集」全十六巻の刊行を始める。

美智子妃・・・1959＝39歳：翌年にかけて、「戦後詩人全集」を拡大し、戦前の詩人を第一巻だけにした「現代詩全集」全六巻を刊行、
安保闘争・・・1960＝40歳：安東次男と駒井哲郎による画期的な詩画集「CALENDRIER」を出版するが、
タイタイ病始・1961＝41歳：*過労のため、肝硬変になり、没した。「稲垣足穂全集」は、そのうちの七巻で中絶した。翌年、遺稿集「詩人たち～ユリイカ抄～」が刊行され、第1回藤村記念歴程賞を受けた。伊達の慎重な配慮によって、「二十歳のエチュード」の原本のノートが遺され、日本近代文学館に寄贈され、現存する。

中村稔「回想の伊達得夫」、